国連環境開発会議
NGOグローバル・フォーラムに参加して
ーブラジル地球サミット　1992・6ー

柏村　忠志

地球環境の悪化を憂慮する県内外の市民・仲間からのご支援を背に地球サミット・NGOグローバルフォーラムに参加することができました。見ること，聞くこと，初めての体験で，学ぶことの多い17日間でした。

・参加資格

92国連ブラジル会議市民連絡会派遣30名の一員

（霞ケ浦をよくする市民連絡会議・県南自然保護ネットワーク推薦）

・世界の参加者

NGO・165ケ国より２５００団体・約35000人，政府関係172ケ国，日本政府109名（米国は48名）

・期　間

1992年6月1日～17日

・訪問地

ブラジル（リオデジャネイロ・ベレン・トメヤス・イグアス）

・参加意義，目的

A　国連環境開発会議で地球生態系を守るための行動指針をつくらせるため世界のNGO（非政府団体）の一員として，会議に参加し，その動向を監視・行動する。

B　世界のNGOがNGO自身の今後の行動指針・憲章をつくる。

C　世界のNGOとの交流・連帯を深める。

D　開催地ブラジル（アマゾン）の課題を理解する。

（A，Bの参加者は各NGOの代表や専門家が中心で，当初から限定されており，多くの人はC，Dへの参加である。但し，毎日午前に開かれるミーテングでA，Bへの参加者から報告をうけた）

・全体の評価

A　国連加盟国の圧倒的参加と，世界のNGOの参加で生物・人類の生存基盤である地球の生態系を守るために論議をしたことの意義は大きい。

しかし，各国の国益を優先した議論が多く，最終的にまとめた条約などは各国の妥協の産物で，地球危機に対する“処方せん”としては極めて不充分なものであった。条約などの取りまとめに当たって，ブッシュ米国大統領は国益，大企業利益にたつ発言・行動が全面にでて，世界のNGOから“近視眼賞”をうけるほど評判は悪かった。最大の政府関係者を派遣した日本も「経済成長あって環境」という姿勢は一貫して変わらず，地球生態系を守るために積極的な行動を行うことなく終始沈黙していた。日本政府もその金銭的幼児性がかわれて，“ゴールデンベビー賞”を米国同様に世界のNGOから満場一致で授与された。世界政治・経済の冷戦構造が崩壊したなかで，国際

新秩序を地球環境を機軸に構築できる最大のチャンスを日本政府は逃がした，という指摘を世界の多くの人々からうけた。

≪国連環境開発会議合意文書≫

・環境と開発に関するリオ宣言
・地球再生のための行動計画「アジェンダ21」
・気候変動枠組み条約（温暖化防止条約）
・生物多様性条約（米国署名拒否）
・森林保全の原則声明

＊国連・経済社会理事会のもとに〔持続可能な開発委員会〕を設置し，フォローアップすることや5年以内に〔国連環境総会〕などを決定

B　世界のＮＧＯは国連の会議で「グリーンピース」「地球の友」などはその会議技術・専門的知識とその集団の力は遺憾なく発揮され，国連の条約づくりに貢献した。

また世界のＮＧＯ独自の条約をつくり，私達の明日からの，次の世代に責任をもつ行動指針を分野，課題別に打ち立てたことの意義は大きい。国家主義で成り立つ国連の今回の合意文書を補充・改革するものである。このような活動を展開した世界のＮＧＯに比べ，日本ＮＧＯはごく一部の組織を除いて大きな働きができなかったように思われる。今後，世界のＮＧＯから学ぶことは余りにも多い。

世界のＮＧＯは今回決定したＮＧＯの35の条約と“地球憲章”を1995年までに国連の正式文書として採択するように運動をおこすこと，1999年に第2回ＮＧＯグローバル・フォーラムを開くなどを確認した。

世界のＮＧＯ参加者の最大の成果は，全世界のＮＧＯがまさに国境を取り外して，人種，民族を越えて，地球環境を守るために心を一つにして“地球市民”として語り合い，連帯を深めたことである。

・感想と今後の課題

1. 地球を天から鳥瞰的に見たのは初めてであり，地球の生態が織りなすすべてが感動であった。紺碧の海，雲海，切り立った山脈と渓谷，延々と続く砂丘・砂漠，アマゾンの緑海と蛇行する無数の河・川，黒い川，泥の川，緑の中の都市，乾燥した町，大農場など，地球一周にあたる飛行から地球の彩りを見入ることができた。
2. 人々の生活は鳥瞰的には見えない。地球サミット開催地ブラジル・リオデジャネイロは社会構造上の貧富の格差は“天国と地獄”ほどあり，また多人種共存社会である。21世紀を展望して地球環境問題を足もとから考える上で最高の開催環境にあったといえる。国連環境開発会議で貧困問題を抜きにして環境問題の論議は成り立たなかった。私たちのグローバル・フォーラムでもその例外ではなかった。
3. 豊かさとは何か。都市から離れた小さな村落を見てきた。水辺にあるいは，森の中に簡易な住み家を作り，自然の恵みのなかで果樹をとり，鳥をとり，魚をとって生活する営みがあった。時計で動き，働く生活をしている私たちにとって，自然の生態系の中で，太陽時間で生活するものにとっての“豊かさ”とは何か。革靴をはいた者が裸足の文化を理解するにも，裸足の者が革靴文化を理解するにも限界がある。ただ，裸足の者の方が，自然の生態系を壊していないことは事実だ。
4. 戦後の冷戦構造が崩壊し，“勝利者”である先進資本主義国が地球環境問題から，その本質を問われる地球サミットでもあった。資本主義体制を支えた思想，政治・経済システムが地球生態系を破壊し，「豊かさ」を保証してきた。そのシステムに本来先進国自らがメスを入れるべき責務があり

ながら，言葉としては「国際新秩序」の用語は踊るが，全く内容がともなわなかった。米国政府の行動に至っては，この会議に参加する資格が問われるほどであった。

農業国（地域）であるアジア，アフリカ，ラテンアメリカなどのＮＧＯから，先進国への期待も含めての発言は多かったが，不満，批判も目立った。政府援助の在り方，大規模なユーカリ植林による伝統的農業・生活破壊，日本企業の無秩序な森林伐採，農業・食糧にたいするガット・市場経済の限界・歪み，他国籍企業の横暴などただされた。発言の中で，あるインジョオから“先進国のシステムから何も学ぶことはない”あるいはアフリカＮＧＯのメンバーから，“私たちは日本からの援助だけを期待していない。われわれからも学ぶことがあるはずだ”という率直な意見が印象的であった。途上国で自然環境を守ることは，政治の民主化と直結する課題で生命をかけた闘いであることも話され，その発言の重みを感じた。

地球生態系保全を軸とする新たな国際秩序はこのような現状・闘いを踏まえながら形成していくべきことであることを痛感した。

5. 地球の生態系を守るために頑張っている世界の仲間と友好と連帯を深めたことは，私にとって最大の成果である。今後，地球生態系の保全を軸に社会システムの在り方，生活の在り方を再検討し，国際連帯への具体的な行動を着実に積み上げていきたいと考えている。

グローバル・フォーラム会場にて

◆活動概要日誌（1992.6.1～17）◆

1日（月）

・成田出発（18：20ヴァリグ・ブラジル航空833便）

・日本とほぼ24時間違い，日本の裏？表？約2万km，ロスで給油。

・機内で，地球サミット参加のペルーのインディオと交流

2日（火）

・リオデジャネイロ着（8：50）

・市内見学～高層ビルとスラム街（フアーベラ）厳重な警戒態勢～

・92グローバル・フォーラム開会式（2日夕日本時間3日未明）～世界のNGO・2500団体，フラメンゴ公園（10万5千平方メートル）内で35のテントを張り350の集会と650の展示を行う～

・リオから飛行機でベレンへ出発（20：00）ベレン着（23：45）→ホテルへ～ベレン市・パラ州（日本の3倍）の一市，アマゾンの河口の都市，樹齢300年といわれるマンゴの並木道路，緑の多いまち～

3日（水）

・≪地球サミット開幕　リオ・セントロ会議場に於て←リオの郊外≫

・ベレン市（5：25）からトメヤスへ（11：25）～バスで200km5時間，赤土の道路，牧場・焼畑，ブラジル人の生活を見る～

・トメヤス，日本人移民がつくった町　人口6～7万人内・日系人1500人。

・トメヤス総合農業協同組合，同農業振興協会，同文化協会など表敬訪問。

・坂口農場（300ヘクタール）とトメヤスジュース工場視察。

・トメヤス農協，文化協会役員と懇親夕食会。～トメヤス文化協会日本語学校学生寮宿泊～

4日（木）

・≪政府主催のジャパンデー　日本NGOの一部不参加・抗議≫

・トメヤス農業協同組合役員と懇談。

・アマゾン熱帯森林研究所敷地視察と視察記念植樹

・セスナ（7人）二機編隊でトメヤスからベレンへ，アマゾン河口周囲を空から視察，原生林・蛇行した河川・密林を裂くような道路と牧場など印象的。

・ベレン近くのガマ川で生活するブラジル人を船で視察。

・ガマ川の中洲にある州立森林研究所訪問～ベレン泊～

5日（金）

・州立博物館見学（広い敷地内にはアマゾンの動物，植物公園も）

・アマゾン開発庁副総裁と会見（11：00～14：30）

・パームヤシ（油脂）農園と油脂工場見学～ベレン泊～

6日（土）

・ベレン（11：00）からリオデジャネイロへ帰る（21：00）

～ベレンから飛行機で，大西洋に面するブラジル北東地域の8つの小都市に“各駅停車”してリオへ，何と10時間！　そのおかげで北東部かんばつ地帯，砂丘砂漠，農耕地塩害を機上から見ることができた～

7日（日）

・日本NGOのミーテング（毎日午前中，政府間交渉の動き・世界NGOの条約づくり，各フォーラム参加者からの報告など行われた）

・アメリカNGOのブッシュ大統領発言（国益に反する生物多様性条約に署名しない）抗議する集会に参加

・各展示を見てまわる。

・ジャパンナイト（日系人の盆踊りなどに参加）

8日（月）

・ミーティング　緊急財政カンパの訴え

・アフリカNGOとの交流会

・先住民会議

・アジア，韓国NGOフォーラム

・ジャパンピープルズデー

9日（火）

・ミーティング

・市のゴミ清掃（リサイクル）施設視察～ゴミ6千トン内1200トンをリサイクル，リオ人口700万人，本年5月から操業～

・国際会議場へデモ“人間の環”で会場包囲

・植物園見学（1808年帝政時代につくられる，植物7千種，みごとな帝王ヤシ並木）

・共和博物館見学（1960年まで大統領官邸であった）

10日（水）

・イグアスの滝見学（三国境沿いにある世界最大規模）

・イタイプ発電所見学（1260万kw/H，全長8km，高さ195m，ビル74階に匹敵，パラグアイと電力折半）

・リオで世界のNGO参加で1万人市内デモ。

11日（木）

・世界の政府首脳リオ入り，市内厳戒態勢

・ミーティング

・アジア，アフリカNGOフォーラム

・先住民条約づくり会議

・ラテンアメリカと日本NGO交流会

12日（金）

・各国首脳演説始まる，宮沢メッセージ問題

・ミーティング

・田村環境庁審議官へ要請（10人）

・アフリカNGOと交流会

13日（土）

・ミーティング

・日本市民リオ宣言案検討

・日本，南太平洋，ラテンアメリカNGO主催，温暖化・核実験場から南太平洋を守るための集会，グリーンピースの“虹の戦士号”船上で行う。

・NGOの「地球憲章」と課題別条約発表と署名開始

14日（日）

・地球サミット閉幕

・日本市民リオ宣言発表

・日本NGOメンバー，NGO条約登録と署名

・日本NGOお別れパーティー

15日（月）

・州立小学校訪問（1985年創立，州立モデル第一号）

・リオ国際空港，ヴァリグブラジル航空830便で出発（23：45）

17日（水）

・成田着（13：30）

（1992・6・28記）

♦♦♦♦♦♦20周年記念アンケート♦♦♦♦♦♦

土浦の自然を守る会20周年を記念して，会と関わりの深かった方々にアンケートをお願いいたしました。

アンケート内容

20年前　こんなことがあった
　　こんな植物があった
　　こんな動物がいた
　　あんな原っぱがあった

21世紀へ向けての提言など

★桜川河口にオニバスがあった

五木田　悦　郎

昭和46年に茨城高等学校教育研究会生物部が行った特別地域自然財分布調査のうち霞ケ浦地区の土浦市について，桜川河口付近，大岩田地先，沖宿漁港付近で，共に多量のゴロモモ，マツモ，ササバモ，エビモ，クロモ，キンギョモ，ヒロハノエビモなどの沈水植物が見られた。特に桜川河口で少量のオニバスが見られたのは印象に残っている。

永国大聖寺の花室川低地に面する台地および斜面にはスダジイをはじめタブノキ，シラカシ，ウラジロガシ等の照葉樹林が続いていたが，約10年前（？）墓域拡張のために一部を残して伐採されたのは残念である。（常総学院）

★宍塚大池について

後　藤　直　和

20年前の昭和47年は私が初めて大池を見た年でもある。その時の詳細な記録はないが，池の植物として抽水植物は現在とさほど違いがなく，浮葉植物ではハスもオニバスもなくてヒシとジュンサイが少しあったことを記憶している。その他の水生植物としてはタヌキモが多く，キクモも少し見られた。

池全体として開水面が広く，カイツブリが数羽泳いでいた。しかしその広い開水面も，それから2年ぐらいのうちに爆発的に殖えたヒシによってほとんど覆われてしまった。そのおもな原因は，養豚の汚水による富栄養化であったと考えられる。オニバスが多く見られるようになったのはその後である。池の周囲の松林や雑木林で荒れていた所は少なく，五斗蒔谷津の湿地以外は比較的楽に歩けて，池を一周することができた。

なお，その年に茨城県高等学校教育研究会生物部（高校の生物教員の研修団体）では県教委から委託された「特別地域自然財分布調査」という仕事をしており，私は第5，第6地区（県立高校の第5，第6学区に相当する市町村全域）の植物の方の責任者になっていたので，その時の報告書の中の一文「第5地区植生概要」を原文のまま記載してみたいと思う。なお，第5地区とは，土浦，石岡，阿見，旧桜，出島，千代田，新治，旧筑波，八郷，玉里，小川，美野里，岩間の各市町村である。

さらにその前の年（昭和46年），霞ケ浦に関して同様の調査が行われており，その報告書の中に高浜入についての記述があるので，その部分も記載する。

―― 第5地区植生概要 ――

この地区内の筑波町，八郷町は筑波，加波

山系に属する地域が多く，山地の様相が顕著である。また岩間町も愛宕山，難台山等山地が多く，同様の特徴を示している。その他の市町村はいずれも，同じ程度の標高を持つ台地と低地からなり，それが細かく入り組んでいる部分も多い。

山地の部分には人工林が多いが，自然林もあり，またその中間的な森林も多く見られる。台地の部分は一般に大半が住宅地及び耕地で，アカマツ等の人工林が諸々に見られる程度で植物相は単調である。しかし台地と低地の間の斜面や小さな谷間の部分には長年人手が加えられていない所があり，そのような所では植物の種も比較的豊富で自然林に近い相観が見られる。

自然林及びそれに近い森林を構成する植物には照葉樹，針葉樹，夏緑樹その他があり，林相も照葉樹林，夏緑林，照葉林を主とする混交林，夏緑樹を主とする混交林等多様である。照葉樹林内にはタブ，アカガシ等暖地性の植物が見られ，山地高所の夏緑樹林にはブナ等の北方系の植物も見られる。

低地部分には水田，住宅地が多く，小規模な湿地もある。そのような湿地や廃田には各種の湿地性植物が多いが，食虫植物は少ない。

筑波町，新治村，千代田町では採石，観光開発等による破壊がかなり進んでいる。しかし八郷町では森林伐採以外の開発はほとんど行われておらず，自然の状態がかなりよく残されている。

(1) 高浜付近（恋瀬川入水溝）7月12日調査

汚染の著しい地域で，入水溝には植物は少ない。入水溝の両側はおもにハス田で，一部に逸出したものも認められる。ハス田以外の部分にはヨシ，マコモ，ヒメガマ，ミクリ等の挺水種がよく生育しており，北側では特にミクリの群落が著しい。最下流部の北側には沈水種も多く見られ，オオカナダモ，マツモが特に多い。

(2) 玉里村高崎付近　7月12日.8月19日調査

高浜入りと言われるところで，湖水がかなり汚染されており，恋瀬川河口に近づくほどそれが著しくなる。植物は浮葉種，沈水種ともに多く，オニバス，コウホネ，ヒシ，トチカガミ，オオカナダモ，クロモ，エビモ，センニンモその他が見られるが，特にオニバスの大群落が著しい。

★世にも不思議な謎の謎

鈴木幹男

私が生涯忘れることのできないことの一つに，あの青々としていた松の大樹と杉林がこの20年間そのほとんどが姿を消して了ったことである。日本全土（北海道を除く）を一周したこの事件は，茨城県に最大の被害をもたらしたが，今なお終息せず，1977年発令された5年間の時限立法と同時に開始された松くい虫特別防除も，丸15年を経過した今日いまだに松枯れは終息せず，さらに5ケ年延長して継続実施中である。土浦市内でも亀城公園の宿木の松をはじめ次々と名木が枯れ，市役所の南西面を覆っていた松も僅かに数本残すのみとなり，土浦周辺に点在していた松もその切株すら消えようとしている。そしてこの謎の多い松枯れの原因は未だにその主因が明らかにされていない。（茨城大学）

★霞ケ浦公園に風車の活用を

須藤清次

1967年に学園都市起工，69年鹿島工業用水送水，70年美浦トレセン起工，71年都市開発を支える水源・霞ケ浦堤嵩上着工。本会発足の72年から花室川が都市排水用に拡幅浚渫された。河口をよぎる国道のすぐ上手の旧道に，日本書記にも誌された“柿の木橋”がある。いまでは柿の木ではとどかないが，ガード橋の手摺の赤い色に柿の名残をとどめている。

霞ケ浦公園に“風車”が立った。風車は産革前期の動力源の一つであり，いまはソフト・エネルギーの象徴である。ここで，湖岸遊園地は風力揚水で動かしてもらいたいものだ。そのために，どの風向でも作動する安価な中東式の縦軸風車も取入れてみたい。

（元茨城大農学部）

★ユートピア社会をめざして

田谷利光

1969年7月20日米のアポロ11号が月の静かな海に着陸，人類が初めて月面に立ったこの日わが家の建て前がありました。大工さんが昼休みに前の水路で泥鰌をとって晩酌のさかなにすると恵比須顔でした。少し雨が降るとぬかるんで車も動かなくなり，大さわぎでした。今や水路もなくなり，道路も舗装され，跡形もありません。幸いなことにわが庭の夾竹桃，翌檜（あすなろ），まきひばなどが天をつく勢いをもって大きく育ち，野鳥の楽園になっています。

私は21世紀にむけてユートピア主義を主張し，社会にあっては理想的社会ユートピア建設という理念，方向性を打ち出すべきであると思います。少なくとも奪い合いやエゴイズムあふれる社会を理想社会と考える者はいないでしょう。反ユートピア度の高い有害企業や暴力団の勢力拡大ではベクトルの向きは反対です。正しさの規範への認識が行きわたった社会です。それは必然的に幸福な人々で構成された世界です。（医師）

★会の限りなき勇気ある闘いを

中川左門

夏の暑い日の事でした。美浦村に建設中のＩＣ工場テキサスインスツルメンツの仮事務所で奥井登美子会長がテキサスの吉崎会長に一通の質問書を手渡しました。これが自然を守る会がテキサスの排水問題に挑み後に大勝利を納めた一瞬とは誰が想像したでしょうか。ＴＶニュースで取材しながら，霞ケ浦の歴史の生き証人になった事を誇りに思っています。

環境問題は人間が生きている限りつき果てる問題ではありません。会の限りなき勇気ある闘いを祈年しています。（ＮＨＫ記者旧土浦通信部）

★アキアカネは少なくユスリカ健在

広瀬　誠

ことしの秋は，アキアカネが少なくさびしい思いをしましたが，昭和40年代の霞ケ浦湖畔には，ハス田から羽化したアキアカネが飛びまわり，秋の景を飾ってくれました。

アカムシの成虫，ユスリカは年によって消長はあるにしても，底泥の中からはいだしてきた幼虫ともども健在。

出島村あたりの越冬ツバメの餌はユスリカなど。いまでもツバメは冬に飛ぶのでしょうか。

会の中心的な皆さんすべてが若々しく眼が輝いていました。土浦の市街地，狭い道路ば

かり。

✶昔，川はゴミ捨て場だった

保　立　俊　一

土浦の自然を守る会ができて20年たった。この20年間の社会の変化はめまぐるしいものがある。会の発足が桜川のゴミ問題からというのも当時のゴミに対する市民や市の対応が考えられる。土浦は湿地をゴミによって埋めて土地作りをしていた。それも市のゴミ行政によってなされていたのである。

市内各地に公認のゴミ捨て場があったことである。その延長として桜川の土手や川の中にゴミを投棄することは当り前のこととして通っていたのである。これは昔からの土浦での生活習慣でもあった。ゴミは川の中で自然に分解して公害にはつながらないものと思っていたし，川もきれいに維持されてきたことにもよる。昭和13年の大水害の時，大量に捨てられた畳を消防車に積んで桜川や霞ケ浦に流した思い出がある。霞ケ浦の自浄作用は，畳さえも受け入れていたかとの思いである。

20年という短い年月の間にゴミ問題に対する社会の意識が大きく変わったものである。

✶20年前の豊かな自然はいま？

吉　田　　繁

昭和45年夏，長岡から土浦に転勤，家具の整理で汗をながしながら，水道の蛇口をひねったが水はカビや塩素の匂いと生温さで喉を通らなかった。以来，我家の冷蔵庫は湯冷ましと清涼飲料水の切れることがなかった。6年後の夏，蜃気楼の魚津に転勤，まず，大量の清涼飲料水を買込んだのが失敗！　いつまでも冷蔵庫の邪魔者扱いだった。北アルプスから流れてきた川の伏流水を汲み上げている魚津の水は夏でも冷たく美味しかった。

当時，研究学園都市の建設が本格化していたが，土浦周辺はまだ緑が多かった。転勤後しばらくして「開発された土地を襲うように千葉県から侵入したセイタカアワダチ草が繁殖して，県内に勢力を拡大しており，調査を始めた」と取材の誘いを受けたのが，故石塚文雄さんが会長だった水海道自然友の会の人達との出会いだった。その後，奥井登美子さん達のグループも加わり研究学園都市や県南地域の動植物の観察や寺社林，屋敷林の調査が行なわれた。東京周辺では既に観られなくなっていた春と秋の七草を研究学園都市で観察，元気に息づいている七草の撮影は心が和み，楽しい思い出となった。学園東大通り線？沿いに細長く残された赤松の林の前では，故木村信之先生と五木田悦郎先生が「自然のバランスを壊され，周りを裸にされた赤松林は可愛相だが枯れてしまう」と怒りを込めて話されたことが強く印象に残っている。「生態系」，「マント群落」，「ソデ群落」の言葉や自然界の仕組みを，この時，教えられた。土浦学園線沿いにある宍塚大池周辺で開発計画があると云う情報を手にし，さっそく，いつものメンバーで観察にでかけた。木村先生達は「開発が進む中で市街地に近い，これだけの自然は貴重な存在だ」と草や木を一本一本確かめながら話しておられた。土浦の6年，素晴らしい人達との多くの出会いと経験は私の大切な財産となった。土浦を離れて16年，今，研究学園都市の赤松林や七草，宍塚大池，霞ケ浦のその後はどうなっているのでしょう？（ＮＨＫ記者・昭和45年夏～51年夏・旧土浦通信部）

あとがき

東京下町ラプソディ

奥井登美子

今冬のインフルエンザは悪性のものが多かった。私の母も肺炎を起こして，あの世におさらばしてしまった。90才だから仕方がない。

母は私が忙しい時，よく土浦に手伝いに来てくれた。1984年，大津での世界湖沼会議の時も，自然を守る会のポスターを，昔風の字で，何枚も書いてくれた。2年後の水郷水都全国会議の時は，私の所が事務所。母は2ケ月半もいて電話番と炊事を引き受けてくれた。

母の若い頃からのあこがれは美濃部さん。美濃部さんが霞ケ浦の見学に見えるという日は，張り切って，3日も前からタラコ，里芋タケノコなど下町風の味つけのお煮しめを大量につくって，みなにごちそうしてくれた。

自分の生まれ育った昔の町の話もしてくれた。銀座というのは，昔から銀座だったわけではなく，母の幼い時は尾張町，竹川町と呼んでいた。それが突然銀座4丁目～8丁目にするとあって，附近の住民はみな反対したそうである。昔からの伝統的な町名を突然かえて，どこにでもあるような町名になってしまうのは，今にはじまったことではなかったのだ。

この間，母の育った明石町の界わい，父の生まれた新富町を歩いてみたが，どこも同じような巨大なビルばかりになってしまっていた。

京橋図書館で4枚一組の地図を¥300で売っていた。江戸，明治，昭和戦前の京橋区の地図で，現在の地図は透明になっていて，昔の地図と重ねてみると，現在の町名と場所がわかるしくみになっている。

変化のはげしい東京でも，図書館などを中心にして，必死になって，昔の東京を伝えようとしている。その姿勢がうれしかった。

絵ハガキのこと

真山　淑枝

20周年記念事業のひとつとして『土浦の今・昔』と題しての絵ハガキ作成の話が決まった。そこで，保立さんが描き続けてきた街の風景からのいくつかをお借りすることにした。月例会で絵をならべてあれこれと始まった。昔を知る人も知らない人も，それぞれ思い入れがあって選考に時間がかかった。私は風景から離れてワカサギを焼いている絵を選んだ。土浦で育った人には懐かしい光景だったし，その側にたたずむ幼い自分をさがす様な思いがあったからである。

昔，駅前通りは賑わっていた。通りの両端に魚留，魚捨という魚屋が張り合っていて，夕方の忙しい時分には働く小僧さん達の怒鳴られる声が響き渡り，それはまた路地裏で遊ぶ子供達の家に戻る時でもあった。通りの中間に小松屋があり，路地に置かれた大きな桶の中に鯉やウナギが活きていて，絵そのままにワカサギ焼きの作業は女の人の役目であった。その頃はどの家でもお父さんの酒の肴は，焼きワカサギをさっとあぶり七味唐辛子を入れた醤油でジュッというのでいっぱいが常であった。また，駅前を右に折れると名のとおり川口町でいまモールとなっている下は河だったし，そこには子供たちがタイコ橋と呼んだ木橋が架かっていた。魚を運ぶ小さな舟が行き来し岸辺の階段をあがった所には川魚の問屋さんが軒を並べていた。開発で最初駐車場になる事を悔しがったオジサン達は今はもう亡い。街は更に変貌を遂げていく。あの頃，車に追立てられる様に河の上を歩いている自分の姿や，駅前が焼野原の跡の様な索漠たる

風景となってしまっていることなど誰が想像し得たであろうか。

お知らせ

高木　純子

あとがきを書いていると，いつもお詫びを言っているような気がします。創立20周年記念号が遅れて申し訳ありませんでした。

5月17～21日には第5回世界湖沼会議がイタリアで開催され，当会から奥井登美子さん真山淑枝さんが，県の湖沼会議調査団のメンバーとして参加いたしました。そして会議のポスターセッションに，古き良き時代の霞ケ浦の風景画（佐賀進氏画）を出展し，次回会場である土浦の紹介をいたしました。

1995年には，第6回世界湖沼会議が土浦市・つくば市を会場に，茨城県・（財）ＩＬＥＣ（国際湖沼環境委員会）の主催で開催される予定です。昨年度，県はこのための企画準備委員会を設置，当会会長の奥井さんが，住民代表として参加しました。湖沼会議の詳細については，イタリアからの帰国報告と併せて，次号でお知らせいたします。

桜も満開の4月には，桜川河川敷を歩き，花見を兼ねた自然観察会が楽しく行われました。遠のいていた自然観察会も，後藤直和先生のご指導のもと，復活の予定です。ぜひご参加ください。

募集！
会員
定期購読者

会費

年間 3000円

●

振込先

宇都宮１－2864

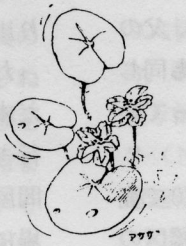
●

宛先

土浦市中央１－８－16

「土浦の自然を守る会」

電話0298－21－0260



桜川26号●発行日／1993年9月25日●発行所／土浦の自然を守る会●発行者／奥井登美子●連絡所／土浦市中央1丁目8～16奥井方／電話(21)0260　●印刷所／(有)ひまわり社